

2022年7月10日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書9章2～13節

説教題：変貌山の励まし

昨年11月、1人の姉妹とお話をする機会があり、「この信仰は本物ですよ」と繰り返し言われるのを聞いて、その方が前に話して下さったことを思い返しました。その方は、お子さんの問題で救いを求めて新興宗教に打ち込まれた時代があったのです。「お金も随分と捧げた」と言われました。でも、やがてその団体から追い出されるようにして関係が切れてしまった。しかし、そこから教会に導かれ、教会で聖書の神に出会われました。「神に出会い『この神様が本当の神様だ。この神様を信じて良いのだ』と分かった時、本当に嬉しかった」と言われました。神を求め、新興宗教のモヤモヤとしたものと通って来られただけに「この神様を信じて良いのだ」と分かった時の喜びは大きくていらっしやっただろう、と思いました。「この神様を信じて良いのだ」という励まし、それが今日の箇所です。ペテロ達が受けている励ましであり、また私達が受ける励ましです。

今日の箇所は「変貌山」と呼ばれる出来事を記します。この山がどこだったのか。ガリラヤの南の「タボル山」説と、北方の「ヘルモン山」説があります。私は「ヘルモン山」説を取ります。ここでイエス様のお姿が栄光のお姿に変わります。「この出来事にはどのような意味があったのか」、「私達にどのようなメッセージを語るのか」、2つのことを考えましょう。

1. この出来事の意味～弟子達を教育した「変貌山」

2節に「六日後」とあります。いつから「六日経って」か、というと、8章27節でペテロがイエス様に「あなたこそキリストです」と告白した、そこから6日後ということです。その時、「ペテロの信仰告白」を受けて、イエスは「ではご自分がメシアであるとはどういうことなのか」、教えられました。8章31節に「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、しかもあからさまに、この事を話された」(31)とあります。ところがイエスがそう教え始められると、直ちにペテロが「…イエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめた…」(32)のです。なぜ諫めたのか。「ペテロが期待していたメシア(救い主)の姿」と「イエスが説明されるメシアの姿」が違うのです。「指導者に殺されるような、そんなメシアでは困る」、ペテロはそう思いました。そう思って必死になって「そうじゃないでしょう」とイエス様を説得したのです。

カナダであるオランダ系カナダ人のご家族にお世話になりましたが、その方々が「オランダ人はカナダが大好きだ」と言われました。第二次大戦中、ナチス・ドイツに占領されたオランダを、カナダ軍が解放したからだそうです。軍事力が軍事力を打ち負かしたのです。「力」が「力」を打ち負かした。私達の中にも、そういうものを期待する思いがあると思います。悲惨なことが起こる。多くの人が血を流す、苦しむ。そうすると「もっと大きな力」がそれを破ること、そういう悲惨を蹴散らす強い力を期待する。長い間、外国の支配を受けて来たユダヤ人にとってメシアとは、そういう激しい力を持った存在でなければならなかったのです。ところが、イエスの語られるメシア像は、そうではなかった。イエス様の十字架を描いた「パッション」という映画が、一時期話題になりました。ローマ兵に鞭打たれて、倒れながら、ボロボロになって重い十字架を担いで歩かれるイエス様がいる。私は、「どこからか正義の味方が出て来てイエス様を助けてくれないものか」と本気でそう思いました。しかし、正義の味方は出て来ない。いずれにしてもイエス様は、人を愛し、自分が殺されることによって—(十字架の上で人々の罪の裁きの身代わりになることによって)—人々に「罪の赦し」を、「神との和解」を、「神と繋がること」によってだけ得られる祝福を、「本当の命」を、「本当の解放」を、与える救い主だったのです。

しかしペテロ達は、イエスの教えるメシア像を理解出来ません。しかもイエスは、ご自分の受難を予告されたばかりではない。「…わたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を

負うて、わたしに従ってきなさい」(8:34)と言われる。彼らはますます理解出来ない、というか理解しようとしません。そこで弟子達に「イエス様の言われること—(暗い言葉/死の予告)—を受け入れ、さらにそこに希望を持つような—(希望を見出すような)」、そういう教育が必要だったので。その希望を、神ご自身が与えて下さったのが「変貌山」の出来事でした。

この出来事は、どのように彼らを教え、彼らに希望を与えたのでしょうか。3つのことが起こりました。1) **イエス様の姿が変わりました**。「ヨハネの黙示録」に栄光のイエス様の姿があります。「その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く…顔は強く照り輝く太陽のようであった」(黙示録 1:14、16)。「変貌山」のイエス様の姿は、「黙示録」の栄光のイエス様の姿に良く似ています。イエス様の姿は、天におられる栄光の姿に変わったのです。それは彼らに「イエス様の神性」を印象付けることになるのです。2) **モーセとエリヤが現れます**。モーセは、神の律法を預かり、それをイスラエル人に与えた「律法の授け主」です。エリヤは、「旧約」の歴史に登場する「最大の預言者」です。「旧約聖書」は「律法と預言者」(ルカ 7:12)と表現されます。モーセとエリヤはその代名詞ですから、2人が現れたということは、「旧約に書き記された『神の救いの計画』はイエスによって成就するのだ—(『イエス様、さあそのまま進みなさい』と彼らが励ました)」ということが示されたということです。3) **雲の中から「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」(9:7)という声がしました**。雲は、神の臨在を意味します。その声が言った。「イエスに聞き続けなさい。イエスに従っていれば間違いない」。

この出来事を受けて、ペテロは「私たちがここにいることは、素晴らしいことです」(5)と言いました。「もうこれでいい。この輝きの中にずっといることが出来ればどんなに素晴らしいことか」ということでしょう。イエス様の姿が、そのように栄光に包まれた。彼らは栄光のイエス様を見た。そのことは大きかったのです。やがてイエス様の輝きは消えました。しかしその後、彼らは、普通の状態に戻ったイエス様の中に「輝き」を見ることが出来るようになるのです。そして大切なのは、8節「自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった」(8)という言葉です。ペテロ達は「輝きの中におられたイエス」が、我に返った自分達と一緒にいて下さるのを改めて知ったのです。おぼろげでしょうが「死を超えて一緒にいて下さる」というイエス様のイメージを掴むのです。こうしてイエスがいくら説明しても分かってほしい弟子達に、強い印象を与える形で「神の教育」が、『イエス様に従って良いのだ。その先に勝利があるのだ』という励まし」が、与えられたのがこの出来事でした。

その訓練(励まし)の効果が、10節に記されています。9節でイエス様は「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」(9)と命じられます。それまでは「よみがえり(復活)」ということが全く分からなかった彼らが、「よみがえり」について論じ始めるのです。ある牧師は「彼らの中に『甦りの光』が見え始めた」と言っています。彼らは、理由が分からない時でもしがみつくことのできるものが、立つことの出来るところが、見え始めた、希望が見え始めたのです。

しかし、弟子達には疑問が湧きます。「もしイエス様がメシアなら、その前に『エリヤ』が肉の体をもって現れ、活動するのではないですか」。イエスは、それに答えつつ、改めて受難予告をされます。この部分は「リビングバイブル」が分かり易く訳しています。「イエスは、『まずエリヤが来て道を整えるというのはほんとうです。実際、エリヤはもう来たのです』とお答えになりました。そして、エリヤが預言どおり、人々からひどい仕打ちを受けたことを説明してから、『では、メシヤが多く苦しみを受け、さげすまれると預言されていることは、どう考えますか』とお尋ねになりました」(9:12~13 リビング・バイブル)。「エリヤ」とはバプテスマのヨハネです。人々はヨハネを歓迎しながら結局は殺してしまいます。そして同じようにイエスを扱うのです。しかしイエスは「預言されている」と言われました。「新改訳 13 節」では「(聖書に)書いてあるように」と言っておられます。「預言されている」、「(聖書に)書いてあるように」ということは、「神の計画通りに」

ということです。「神は全てのことを知っておられる。どんなことも神の御手の外で起こっているのではない。神は全てを包み込む計画を持っておられ、十字架の苦しみは神の御手の中で変えられる」と語られるのです。彼らは、これまでとは違う「光」の中でイエスの言葉を聞き始めるのです。もちろん不十分です。それでも「苦しみ、悲しみの先に光がある」というキリスト教信仰のアイディアに触れるのです。「変貌山」の出来事は、このように弟子を教え、励ますものだったのです。

2. この出来事のメッセージ～信仰生活にある「変貌山」

イエス様の十字架と復活、そして聖霊降臨によって教会は誕生しました。しかし「なぜ十字架に掛けられて殺されたような者を救い主として拝むのか」、教会が問われたことです。イエスは、力で力を蹴散らすようにして救いを達成された方ではなかった。自分を犠牲にして、命まで差し出して、救いを達成された方でした。そんなイエスを、人々はどうにでも扱いました。イエスはその中で、一見「弱さ」の中を歩いて行かれました。しかしそれは「神の御心の道」だったので、「弱さの象徴である十字架」は「救いの道を造る勝利の印」となったのです。教会は「神を信頼して神の御心の中を歩まれたイエス」の中に本当の勝利を見たのです。だから同じように神の御心を—(イエスの言葉を)—第一にして、弱さの中をひたすら歩んだのです。力に対して力で対抗しようとしませんでした。また出来ませんでした。その結果、確かに多くの苦しみがありました。しかし、その力を持たない教会が、やがてローマ帝国に勝利するのです。教会を迫害しては、もはや帝国がやっけて行けなくなるのです。キリスト教に最後に抵抗したローマ皇帝は、こう言ったと伝えられています。「ガリラヤの人よ—(ナザレのイエスよ)、あなたは勝った」。

この箇所は何を語るのか。神は言われました。「これはわたしの愛する子である。これに聞け」(7)。ペテロが「わたしたちは、小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために…」(5)と言った時に聞こえて来たのは、「(そんなことはよいから)—彼の言うことを聞きなさい—(イエスに従っていれば間違いない)」という言葉でした。私達がすることも、神の御心の中を歩むために、イエスに従うために、イエス様の言葉を聞き続けることではないでしょうか。そして聞いたことを大切にして歩むことです。なぜなら、人々は、イエス様を好き勝手にあしらいました、殺してしまいました。しかし、イエスが神の御心を歩まれた故に、神はイエスを甦らせたのです。9節には「人の子が死人の中からよみがえる…」(9)という言い方がされていますが、聖書には「よみがえらされた」と受動態に書いてある箇所が沢山あります。神がそうして下さるのです。

同じように、私達の人生も、自分の思うようにはならない。色々なことで翻弄され、傷を受け、本当にどうして良いか分からないようなこともあります。しかしその時も、私達がすることは、イエス様の言葉を聞いて、神様を信じ、イエス(神)の御心を生きようとするのだと思います。その時、初代教会が弱さの中で神の勝利を経験したように、私達も—(私達は弱いかも知れない。でもその弱さの中で)—神の勝利を経験して行くはずなのです。私達の業ではない、マイナスをプラスに変えて行かれる神様によって、神の御業に与るはずなのです。

しかし、それでも私達の信仰は、時には弱り、疲れます。時には絶望的な思いになることもあります。私もそうです。しかし神様は、私達がイエス様に従い歩くのが難しくなる時、励ましを必要とする時、その時に私達にも「変貌山」を与えて下さるのではないのでしょうか。新しく神を知る経験、イエスが一緒にいて下さることを新しく確認させられる経験、そのような私達にとっての「変貌山」を備えて下さるのではないのでしょうか。

何度もご紹介している、カナダで出会ったご高齢の兄弟の話を思い出します。このご夫妻は、施設の子供さんを短期間、家で与り、お世話することをしておられました。ある時、1人の子供さんを3か月預かってお世話をされました。ところが施設に返す時になったら、その子が「帰りたくない、このままここで暮らしたい」と言いました。兄弟は、自分達の年齢を考えた時、この子を大きくなるまで育てられるかどうか自信がない。そこで「やはり施設に返そう」と施設に連れて行った。と

ころが、そんなある夜、夢の中に小さな天使が現れて、彼の膝に乗って彼の胸をつかんでゆすった。同時に「最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25:40)の音が聞こえて来たのです。それで、目が覚めた時、「引き取るのが御心や」と確信されたのです。不安はあった。でも、施設に行き、その子の手を引いて施設から帰る時、空を見上げたら、西の空から東の空までキリストが両手を広げて立っておられたのが見えたそうです。「その子の責任は私が持つから、あなた方は出来ることをやりなさい」という励ましかったと思います。そしてそれは、その方にとって「変貌山」だったと思います。

いつも、いつも、特別な出来事があるわけではないかも知れない。また何か劇的なものではなく、もっと日常的な、もっと細やかなものかも知れません。しかし神は、私達が神への信頼を新たにするために、これからも色々な「変貌山」を与えて下さるに違いないと思うのです。私達の信仰生活はそのようにして導かれて行くに違いない、私はそう信じるのです。

でも、私達には心配があります。「神を知らされる経験をした。でもその私は、御心の中を生き得ているのか」、そういう呻きがあると思います。ペテロはこの後どうなるのでしょうか。彼も、イエス様に従って行くことが出来なくなるのです。十字架の前にイエス様を捨てるのです。私達も、イエス様に従えないことが多いかも知れません。しかし、だからこそイエスは、力を持って来られたのではなく、私達の代わりに罰を受けるために弱くなって来て下さったのです。ペテロが裏切る前に既に言われました。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟達を力づけてやりなさい」(ルカ 22:32)。私達の弱さは、十字架の故に赦されているのです。平行箇所「マタイ 17章」にこうあります。「…『…彼の言うことを聞きなさい』という声がした。弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、『起きなさい。こわがることはない』と言われた」(マタイ 17:5~7)。「起きなさい。こわがることはない」(マタイ 17:7)、この声は、地上を生きる限り、神に逆らうものを抱えながら、そしてそれを赦してもらいながら信仰生活をして行く私達に、イエスが語り続けて下さる言葉だと思います。私達は、あなたは、赦されているのです。

まとめます。イエス様の言葉を聞き、神を信じ、御心を生きようとする中に勝利の生き方があることを信じましょう。私達は弱くても、神が私達を赦し、人生のイニシアティブを取って、私達の人生に勝利を与えて下さいます。そのように歩いていく先には「この輝きの中にずっといることが出来ればどんなに素晴らしいことか。何も要らない」、そのような時が備えられているのです。信仰が弱った時は、主が「変貌山」を与えて励まして下さいます。その導きにすぎり、信仰に励みたいと思います。